

田端元（たばた はじめ）偉人伝

時代	事項
幼少期	<ul style="list-style-type: none"> ・1892年(明治25年)1月10日、青森県上北郡法奥沢村大字沢田で、農業を営む仁六、トメの長男として生まれる。 ・家は貧しく食べるのがやっとの暮らしでしたが、甘えん坊な子どもでした。 ・田谷(たや)地区にある沢田尋常小学校に入学するころになると、本人の回顧では「俺は貧乏な百姓の子でガキ大将」だったといいます。また、元少年はこのころ、初代校長として赴任した恩師となる鈴木先生と出会います。誠実と実践を教育の柱とする鈴木先生の教えは元少年に大きな影響を与えました。 ・また、先生に引率されて見送りに来た八甲田山の雪中行軍隊の出来事(弘前隊は目的を果たし生還したのに対し、青森第五連隊は遭難し、隊員のほとんどが死亡する惨事)は、元少年に次のような教訓を与えています。「何事にも豊富な経験が役に立つ。指導者の判断で成功もするし、失敗もする。」 ・1902年(明治35年)、東北地方を大飢饉が襲い、翌年5月(小学校5年生、十一歳の時)、田端一家は北海道の後志管内倶知安村峠下に移住することとなります。峠下奥地には南部衆と呼ばれる青森県人の人達がいました。 ・移住してからは学校どころでなく、両親を助けて、馬の世話や炭焼きなど懸命に働きました。
リーダーとしての目覚め、そして結婚	<ul style="list-style-type: none"> ・いい若者に成長したころ、同じ環境にいる友達ができ、未来について語り合い、周囲で起こる困りごとに親身に尽くすようになっていきました。助け合いながら生きていく、いつしか元は、若者たちのリーダー格となっていました。 ・時代は明治から大正へとかわり二十歳になった元でしたが、暮らしは少しもよくなりません。これではだめだと思いましたが、何をどうすれば良いのか見当もつかなかったといいます。 ・この時代、数え年二十歳になると兵役が課せられていましたが、家督を継ぐ農業後継者の長男は法律で免除されていました。 ・元は、黒松内村出身で、農家の宮越興作、アキの次女シミと見合い結婚することとなり、3年後、長男が生まれました。 ・このころから元は、集落の世話役になり、困ったことがあったらすぐ話を聞いて対応したといいます。
真狩村への移住、そして学び	<ul style="list-style-type: none"> ・1920年(大正9年)、元一家は倶知安町から真狩村の豊川集落に移住しました。新しい集落である豊川や知来別には、青森の十和田で交わった南部衆の仲間たちが大勢いました。 ・新しい土地は、国有未開地百四十三町を農地として譲り受けました。(今の価格で四千万円相当になります) ・元は仲間たちの協力で馬鈴薯を育てる一方、大事な農耕馬や牛も飼育し、二十八歳になったころは、集落でも屈指の稼ぎ頭になっていました。 ・元はこの集落にきて、さまざまな経験をし、助け合いの精神と集落の数々の決まり事を学ぶ中で、正義感あふれる人間に育っていきました。小学校も卒業していない元ですが、豪気で明朗な性格、物事をはっきり言い、社会事業に奉仕する姿が誰からも好かれ、共感を得るようになっていったのです。 ・そんな中、元は先輩の話や新聞、雑誌から得る社会知識だけではなく、もっと学ぶことができないものかと考え、農業をしながらでも勉強ができる通信教育(早稲田講義録)の入学手続きをとり、学びだしました。
リーダーとして頭角を現す	<ul style="list-style-type: none"> ・1923年(大正十二年)、三十一歳の時、北海道庁食糧農産物嘱託検査員になることとなります。(農産物の検査のほかに品質の改良、増産の指導も行う。) ・1931年(昭和六年)から馬鈴薯の本格的な病害駆除を開始し、村の馬鈴薯生産量は著しく増加していきました。 ・ところが、昭和六年、七年と心配していた凶作になり、村内農家は衝撃を受けました。村も緊縮財政をとり農家を救済しようとしたましたが、どの農家も疲弊していきました。 ・1933年(昭和八年)には、真狩村の財政自体が立ち行かなくなり、経済更生特別助成村に指定されました。 ・1934年(昭和九年)、元は講習会を開き、「男爵イモを続けて栽培すると病気になりやすく、健全な生育が阻害される。害虫に強いメークインや紅丸をもっと多く作りたい。麦、豆類、ビート、エンバクなどの品種を何年かに1回のサイクルで作付けし、殺虫剤を用いるなどしてはどうか」と訴え、農家はその意見を聞き入れ、新たな農業技術の導入に舵をきりました。 ・元は、同志とともに建設した共同澱粉工場で、馬鈴薯の紅丸を用いた澱粉の生産に全力をあげ、これが落ち込んでいた同志らの家々を支えました。

時代	事項
村会議員になる	<ul style="list-style-type: none"> ・40代になった元は、村の政治に強い関心を抱くようになりました。「もっと村の役に立ちたい、そのために勉強したい。」と思い、四十一歳で村の産業組合理事、翌年には農業会長の職につきました。 ・1936年(昭和11年)二月、陸軍の青年将校らによる反乱がおこりました。いわゆる二・二六事件です。村内もこの話で持ちきりになりましたが、この年、四十四歳の元は、全村的な推薦を受けて、村会議員に初当選しました。 ・議員になって知ったことは、村内でのもめごとが多く、複雑な人間関係のせいか議員の意見がまとまらないことでしたが、「村民のために尽くすこと」を基本に、自らの信念を貫きました。 ・1938年(昭和13年)、中国との戦争が始まり、田端家の長男が出兵したため、元は家業の農業に専念しなければならなくなり、村議を辞しました。 ・1940年(昭和十五年)五月、周困からの要望もあり再び議員に復職しました。そして、村民が要望する橋や道路を、若者たちの労働奉仕を呼びかけ、短期間で実現していきました。このことにより、元は、昭和17年に開催された真狩村開村記念祭で、村長から篤行表彰を受けました。
農地解放	<ul style="list-style-type: none"> ・戦争が終わり、GHQ(連合軍総司令部)の統治により財閥解体と農地解放の改革が発せられました。この時、元の耕地面積は七十町歩で大地主になっていました。 ・1946年(昭和21年)一月、自らの判断で、自分が耕作している農地を残し、小作人たちに貸していた農地を全部無料で開放します。GHQの影響もありますが、「土地は耕すものが所有するべし」という元の信念によるものでした。(日本政府が農地解放を断行したのは、その9ヶ月後でした)
初代農業協同組合長そして初代議長になる	<ul style="list-style-type: none"> ・初代農業協同組合長に就任して身の引き締まる中、新憲法が生まれ、地方自治地の知事、市長、村長、村議などは選挙により選ばれることとなりました。真狩村での初めての選挙は1947年(昭和22年)五月に行われ、村議会議員は定員16名ですが、トップ当選を果たし、そして初議会で初代の議長に選出されました。
無給の村長誕生	<ul style="list-style-type: none"> ・1949年(昭和24年)、村長が急死し村が大騒ぎの中、「後を継ぐのは田端さんしかいない」という役場、議会からの声に応え、立候補し無投票で当選、村長に就任しました。 ・元は、村長として報酬などは一切受け取らず、村のために一身をかけて仕事をしようと決意を抱いていました。 ・毎日、朝早くから出勤し夜遅くまで働き、村の冠婚葬祭には必ず顔をだします。土曜、日曜でも出かけ、休みなく働きました。
村長として村民のために	<ul style="list-style-type: none"> ・猛然と仕事に取り組む中、真っ先に手をつけたのが電気の導入です。村にはまだ電気が通っておらず、ランプ暮らしの地域がありました。 ・北海道食糧缶詰株式会社と東食農産会社の二つの農産物加工場を誘致しました。若い女性の雇用拡大につながったといえます。 ・村営の採石場を開いて機械による砕石を開始しました。 ・村民誰でも使える公民館を建設しました。地域の会議や婦人の生活改善の会合などに使われ、交流の場にもなりました。まだテレビがそれほど普及していない中、公民館の一室にテレビが置かれ、大人も子供もやってきてテレビに見とれていたそうです。 ・村体育協会の4代目会長に就任し、公認総合グラウンドを完成させました。 ・「人にとって大事なものは、教育ともう一つ医療だ」という口癖のとおり国保直診病院を開設しました。木造二階建て、外科と内科の医師が常駐し、ほかにレントゲン技師と薬剤師、看護婦7人、事務員、賄い婦、雑役職員までそろっていたといえます。 ・この時代、真狩村は冬になると道路が雪に閉ざされてしまいます。通行に必要な馬そりさえ出すこともできません。真狩からニセコに通ずる道路確保のため大がかりな除雪を実施し、これが全道の道道除雪第1号となり、注目を集めました。 ・1952年(昭和27年)年には、冬季バス運行期成会が結成され、道南バスと小樽土木現業所の協力により、ブルドーザーで道路が除雪され、バスの運行が開始されました。 ・村内でもっとも豪雪地域といわれる美原地区の通学路をいかにして確保するかは村の課題でした。美原から真狩小学校までは片道4Km余りで、夏場は父母たちが交代でトラックに乗せ、冬は毛布にくるまり、湯タンポを抱かせて馬そりで送り迎えするしかなかった時代です。この対策のため、美原小学校の建設に尽力し、1954年(昭和29年)、へき地教育の独立校として開校されました。

時代	事項
村長として 村民のために	<ul style="list-style-type: none"> ・1953年(昭和28年)、2期目の村長選を無投票で再選を果たし、相変わらずの乗馬ズボン姿で自宅から歩いて役場に通いました。 ・この年、低温や長雨による日照不足により、農作物がまったく育たず冷害凶作に陥りました。また、昭和31年には、さらにひどい冷害に襲われました。 ・農家の救済対策として、資金の融通を実施するとともに、救農土木工事、災害復旧工事の実施により農家の人々が働けるようにしたことで、現金収入が得られるよう対策したのです。
	<ul style="list-style-type: none"> ・老朽化した真狩神社を建て替えようという動きの中、神社新造営奉賛会が発足し、元は会長になりました。冷害にみまわれたこんな時こそ、村民みんなで寄付金を集めて、われらの守り神を祀る立派な神社を建てようというわけです。 ・新しい神社がまたたく間に完成し、鎮守の森や参道のサクラ木も整備されました。
	<ul style="list-style-type: none"> ・1957年(昭和32年)九月、3期目の村長選に立候補し、選挙戦となりましたが再選されました。 ・真狩村は馬鈴薯づくりが盛んなので、夏から秋にかけてはイモの収穫で追われます。一家を挙げての作業ですから学校を休んで手伝う子どももいるほどです。元は徳成寺の住職らと相談して、寺内に「真狩季節保育所」を設置し、自らが所長となり幼児を預かることにしました。母親たちは安心して仕事ができると喜んで預け、その数は61人にもものほりました。
	<ul style="list-style-type: none"> ・元は村長の仕事だけではなく、さまざまな要職についています。産業組合長、土地改良理事長、農電組合長、保護司などです。さらには地方自治、社会福祉の振興や戦病者戦没者援護まで幅広く尽力しています。 ・また、「無給の村長」として村の発展に尽くしているだけではなく、寄付も行いました。
	<ul style="list-style-type: none"> ・1961年(昭和36年)九月、4期目の村長選に立候補し、再選を果たしています。 ・このころ真狩村の人口は5千3百人ほどでした。 馬鈴薯の収穫時期、農家の「イモほりさん」と呼ばれる人たちは5百人ほどいましたが、まだまだ人手が足りません。そこで自衛隊への協力を思いつき、道庁や防衛庁への陳情に動きます。 ・そして昭和36年、陸上自衛隊倶知安駐屯地から百二十人の隊員たちが真狩村へやってきました。 ・この自衛隊の援農は翌年も行われましたが、その後全国的に定着し、災害時や緊急患者の搬送などと並ぶ制度として確立していきました。
	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者に対する感謝の催しとして、長寿番付を作成し、各家庭を訪れて祝い金を贈りました。「敬老の日」が祝日になるずっと前の話です。 ・元が催したイベントの中で、大いに盛り上がったのがばん馬競争です。真狩村だけではなく留寿都、京極などからも馬自慢が参加しました。
	<ul style="list-style-type: none"> ・1963年(昭和38年)、長年の念願だった真狩季節保育所がまっかり保育園の中に誕生しました。しかも保育園の園長に就任しました。 ・もう一つやり残した仕事として、老人ホームの建設があります。老人クラブ「真鶴会」だけは発起人らとともに創設したのですが、老人ホームまでは手がとどきませんでした。 ・1964年(昭和39年)は、真狩村開村70周年に当たります。元は信頼厚い村議と相談して、郷土芸能を作ろうということになり、作曲家の八洲秀章氏に頼んで「マツカリ音頭」を作ってもらいました。八洲氏もまた「村に恩返しをしたい」と思い無報酬で引き受けてくれました。この楽曲で「千人踊り」を実施するのです。
<ul style="list-style-type: none"> ・これまで村には、村史と呼ばれるものがありません。この年、「真狩村史」がようやく完成しました。戦時中に一度着手したのですが、戦争の影響で中断を余儀なくされ、戦後20年近く経って完成されたのです。これが村長としての最後の仕事になりました。 ・1965年(昭和40年)、元は長く勤めた村長職を辞しました。七十三歳でした。 ・退任する時、議会議員や役場職員にこう述べたといいます。「村長として自分のやったことはすぐ忘れられていい。君たちは村の発展のため知恵をしぼり、村の適した人材を育てることが大切ということをお忘れなでほしい。」 	
栄誉を受ける	<ul style="list-style-type: none"> ・退職と同時に「名誉村民第1号」の称号を受けます。 ・また、勲五等双光旭日章などの栄誉を受けました。
人生の終焉	<ul style="list-style-type: none"> ・1968年(昭和43年)6月6日、自宅で命の火が消えるようにひっそりと亡くなりました。享年七十六歳。葬儀は公民館で村葬により行なわれました。

【引用文献】

公益財団法人 北海道科学文化協会 発行
 北海道青少年叢書(三十八) 北国に光を掲げた人々
 乗馬ズボンの村長 田端元の生涯 下山光雄

羊蹄ふるさと館展示資料

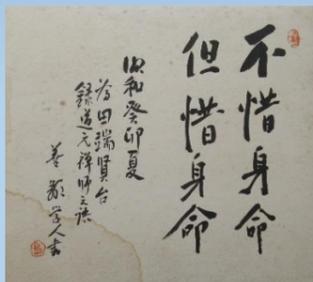


田端元 顔写真

勲章等



愛用品等



感謝状・表彰状等

